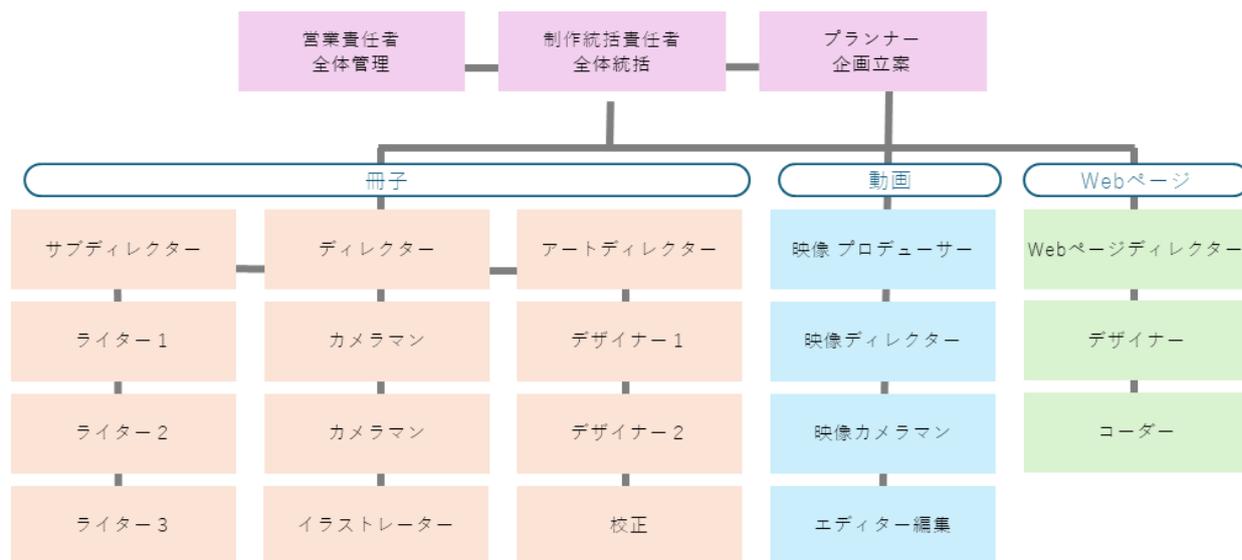


## 業務従事予定者の配置計画及びスケジュール

【例】貴社（者）として従事者をどのように配置し、業務を遂行していくかについて記載してください。  
 また、本業務のスケジュールおよび進行管理について記載してください。  
 記載に際しては、業務担当者が事故等により不在となった場合に、担当者と同等の人員を配置するなど、業務の継続性を担保する貴社（者）の体制を明記してください。

### ■業務予定者の配置計画

自治体・官公庁など行政の広報ツールに精通したスタッフが本業務に参画させていただきます。  
 各制作物にディレクター2名やサブディレクターを配置し、メイン担当者が不在でも業務進行が遅れないように充実した人員を配置し、業務の継続性を担保いたします。



### ■本業務のスケジュール

下記スケジュールは制作工程の概要です。実制作の際には、お客様のご都合に十分配慮し詳細なスケジュールを作成いたします。制作にあたりましては綿密に報告を行い、適宜打ち合わせをさせていただきます。

		7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
冊子	企画・構成調整	■										
	企画・構成決定		■									
	研修		■	■								
	取材先調整			■								
	聴き取り取材				■	■	■	■	■	■		
	ビジュアル素材手配					■	■	■	■	■		3月
	フォーマット作成											3月
	取材・写真撮影					■	■	■	■	■		3月
	テープ起こし											1日
	原稿作成・リライト											日
	ビジュアル素材作成						■	■	■	■		納品
	デザインレイアウト									■	■	納品
	文字校正										■	納品
	映像	撮影			■	■	■	■	■	■	■	
編集・確認									編集後、都度確認していただきます。			
音楽・MA											■	
デザイン・確認						■	■	■	■	■		
コーディング・確認											■	■

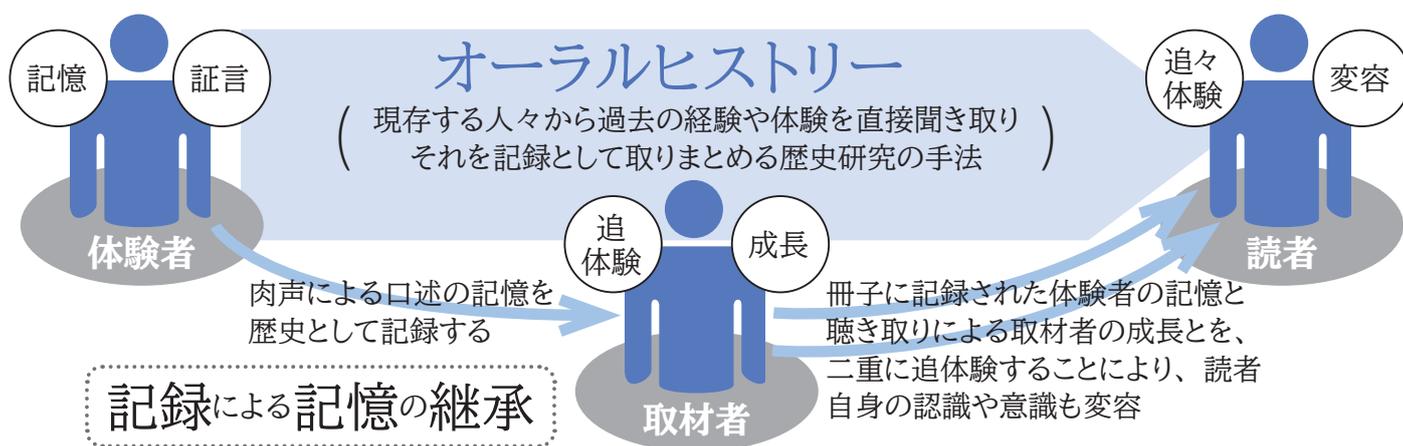
※A4サイズで作成してください。文字のサイズは原則として11ポイント以上とします。

## はじめに：オーラルヒストリーの特性を活かした、記憶と心の継承を

終戦から80年を迎えようとする今、戦争を自ら体験した人たちの肉声には、かけがえのない価値があります。

そのような体験者の証言をただ記録するだけでなく、そのなかで取材者たちがどのように成長して、本誌を手にした読者の認識や意識がどのように変容するかについてまで視野に入れておくことが、「平和都市宣言」40周年記念事業の一環として本誌を制作し発行するうえで、何より大切な事柄ではないでしょうか。

文献よりも、肉声を一次資料として重視するオーラルヒストリーは、本誌が担うこの役割にふさわしい手法です。体験者／取材者／読者という三つの立場のなかで、記憶と心を確かに継承していけるよう図ってまいります。



### 冊子を制作するうえで、とくに求められる取り組みとは

前述のような発行の意義や役割を踏まながら、本誌を作成していくなかで、とくに求められる制作の条件として、私たちは二つの大きな取り組みを挙げさせていただきます。

#### 【コンテンツとしての価値を深める】

##### ▶ 共感性を深める

体験者には、記憶を辿って自らの言葉で語っていただきながら、取材者との対話によって共感し合うなかで、よりわかりやすい伝え方をしていただけるよう支えてまいります。

##### ▶ 証言性を深める

長い歳月を経た体験者の記憶には、客観的な裏付けも必要ではないでしょうか。未来の読者の関心へも応えられるよう、できるだけ内容の確認を行ってまいります。

##### ▶ 地域性を深める

体験は、地域と強く結びついているはずです。芝 / 赤坂 / 麻布の三区の当時の様子や、空襲や疎開による変化など、歴史の舞台としての地域とのつながりも深めてまいります。

##### ▶ 多様性を深める

戦争はあまりに巨大で、一人ひとりの体験もまた多様です。空襲や疎開、戦闘や引き揚げ等の共通項を探りながら、個人としての体験の多様性も重んじてまいります。

#### 【読み手の興味や関心を惹きつける】

##### ▶ 成長する取材者

資料や文献などで情報へ接することが多い現代の高校生や大学生が、高齢者の肉声による戦争の体験を取材することで、どのように成長していくかの過程も見つめてまいります。

##### ▶ 現代との時間の接点

はるか遠い昔のことではなく、今と地続きの時間のなかで戦争が起きた事実を、リアリティを持って読者に感じてもらえるよう、現代との接点を誌面に織り込んでまいります。

##### ▶ 現代との空間の接点

今、毎日を送っている街角に、かつて軍の施設や軍需工場が多く存在し、それがたびたび空襲を受ける背景となったことなど、同じ空間における歴史の重なりを示してまいります。

##### ▶ 積極的なメディア連携

文字や図版が印刷された本誌を基点として、動画やウェブや SNS 等のデジタル / オンラインメディアなどと連携させる、メディアリレーションを図ってまいります。

## 戦争・戦災体験集の第4集という位置づけ

戦争や戦災を直接体験した人たちの高齢化が進む傍ら、世界の情勢は戦禍によって激しく揺れ動いています。4集目となるこの体験集は、新たな証言を取材し記録するだけでなく、以前に刊行された体験集も含めた、港区の戦争・戦災体験を広くカバーしながら、次代へとつないでいく、大きな使命を担っているのではないのでしょうか。

私たちは、体験を「追体験」し、読者を「啓発」し、さまざまに「活用」できる冊子として本誌を制作することで、この使命に応えていきたいと考えます。

### 追体験は可能か

80年も前の体験を、大きく離れた世代のあいだで共有するのは、容易なことではないでしょう。

### 成長する取材者

年長者への接し方や、戦時の時代や社会の状況を学ぶなかで、若い取材者も成長していくはずです。

### 読者への継承

直接の体験と、取材者の成長も含めた体験が、読者へ継承されます。

### 啓発の手がかり

テーマが明確なために画一的になりがちな読者の捉え方を、もう一歩踏み込ませられないのでしょうか。

### 現代との関わり

時間や空間での関わりだけでなく、服や食べ物などのアイテムなら、関わりがより身近になるはずです。

### 等身大の共感

生活感のある捉え方により、等身大の共感を得られやすくなります。

### 史料として活かす

10年おきに刊行されながら、歴史的な資料として、あまり活用されていないのではないのでしょうか。

### インデックスの整備

これまで掲載された項目をカバーするインデックスの整備によって、実用性が大きく高まるはずです。

### 未来へのメッセージ

体験者が不在となる未来へも、本誌によってメッセージを託せます。

## 制作にあたってのコンセプトと、具体的な方針

### 企画コンセプト

- ① 本人の語りの魅力を伝える  
→戦後80年を生きてきた体験者の肉声の語りを活かし、話し言葉の魅力と説得力を伝えます
- ② 端的な見出しで、内容を掴みやすく  
→拾い読みでも記事の内容を掴めるよう、見出し類だけでも概要やポイントを示せるよう工夫します
- ③ 体験の視覚化で親しみやすく  
→言葉だけでは捉えにくい内容は、図や表などへ視覚化することでわかりやすくします
- ④ 多面的・多角的にアプローチ  
→体験談を軸にしながら、当時の地勢的な背景や社会情勢など、多様な側面や角度からアプローチします

### 取材コンセプト

- ① インタビュアーとしての心構えと技術  
→年長者との対話するスキルを身につけてもらいます
- ② 歴史についての系統的な学び  
→証言の背景となる史実や背景を学んでもらいます
- ③ 自分や仲間と対話する姿勢  
→取材の前と後に、自らや仲間と対話してもらいます

### デザイン・ビジュアルコンセプト

- ① 清澄で明るいモダンなトーン  
→穏やかでナチュラルな雰囲気を基調にします
- ② 柔らかなタッチの写真と図版  
→撮影や図解の工夫で、人の温もりを感じさせます
- ③ 品位と節度を備えた文字や余白  
→飾らず、読みやすく美しい文字組のデザイン



## 第2章 体験を聴く：戦争体験の記憶

インタビューと手記を7つのテーマに分けて編集。若い頃に戦争を経験した語り手の体験と想いを今の若い世代が聴き、どう感じるのか？ 双方の感性を伝えることで読者の興味を喚起します。

### インタビューページの構成

#### ▶ 一人の体験者につき10ページで展開

体験者の声だけではなく、高校生や大学生の視点が変わるよう、インタビュアーのコメントも積極的に掲載します。

- ・1見開き目 ゆかりの場所をバックに体験者とインタビュアーを撮り下ろした写真を導入とし、リードや見出しでインタビューの概略を伝えます。
- ・2～5見開き目 対談形式のインタビュー本文に加えて、関連するコラム・資料などを掲載します。

#### ▶ 戦時下と今をビジュアルで比較

体験者の証言に基づき、当時と現在の暮らしを、イラストや写真で比較するコーナーを設けます。読者がインタビュアーと一緒に追体験できる切り口を心がけます。

### インタビューのその後

可能であれば、インタビュアーたちの座談会を開催。戦争について考え議論を行う様子を紹介し、平和への想い届けます。



衣服／食事やお弁当／住環境／遊び／日用品などを想定

## 港区戦争・戦災体験集全4集 インデックス

第1～4集に収められた体験・手記すべてを検索できるインデックスのブロックです。3つのカテゴリーから、過去に刊行された冊子の情報へと誘導します。

### 3つのカテゴリー

#### ▶ 地図で調べる

体験や手記に出てくる場所を、旧3区（赤坂区・麻布区・芝区）それぞれの地図に落としこんだインデックス

#### ▶ 年表で調べる

戦中から戦後にかけての年表と照らし合わせながら、体験や手記を検索できるインデックス

#### ▶ テーマで調べる

軍隊／外地／銃後／空襲／疎開／原爆／戦後7つのテーマから検索できるインデックス

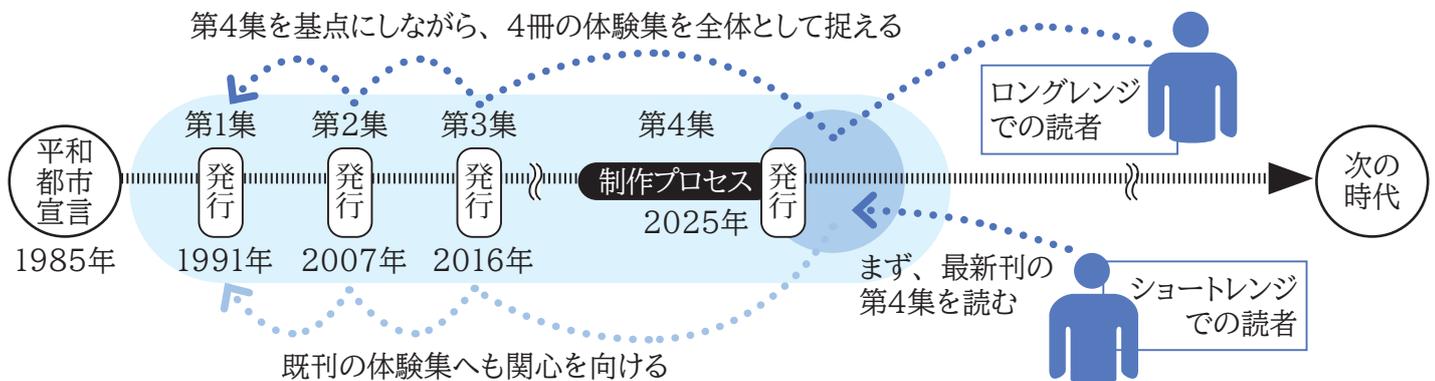


「地図で調べる」誌面のイメージ

## 提案にあたって：体験集のライフスパンを幅広いレンジで見据えます

新たな冊子をつくる時、つい発行直後の反応に目を向けがちです。しかし、本誌のような定期的に刊行される体験集においては、現代の読者だけでなく、もっと先の時代の未来の読者による利用についても、視野に収めて良いのではないのでしょうか。

私たちは、ショートレンジとロングレンジの双方の読者に、本誌への関心を高め利用を促していくことをめざします。



### 関連資料で重視すべき興味や関心のポイント

前述のような時間軸を踏まえつつ、既刊の3冊の体験集も視野に入れますと、本誌の利用形態は、かなり多様なものになりそうです。多くの人に本誌への興味・関心を抱かせることが、関連資料の目的ではありますが、今回の第4集だけを対象とするのでは、物足りないようにも思われます。

私たちは、制作途中の段階から、発行して何年か経過した段階まで、長い期間のさまざまな読者予備軍を想定しながら、以下のようなポイントを重視して、本編への興味や関心を促していきたいと考えます。

#### ◎子どもや若者だった体験者たち

80年以上前に戦争や戦災を体験したとき、今のお年寄りたちは、みんな子どもや若者でした。遊び、学び、喜び、苦しみ、また夢を抱いた彼らは、今の子どもや若者と同じように、青春を生きていたはずで

す。古びた昔話をするお年寄りとしてではなく、取材する側と同じように若くて幼かったときに刻まれた記憶を、できるだけフレッシュな体験として描いていくことが大切ではないかと考えます。

#### ◎取材者への気持ちの投影

取材をする高校生や大学生たちは、まだ戦争や戦災に情報でしか触れていないわけですが、お年寄りたちの実体験を聴くことには、積極的な姿勢を持っているはずで

す。まだ未熟なところも多いはずのこの取材者たちに、読者が自分の気持ちを投影できるよう、彼らの興味や関心のあり方を率直に描くことも大切ではないかと考えます。

#### ◎過去と現在、未来をつなぐ

前号の体験集の発行から、十年足らず。しかし、その後のコロナ禍や戦禍は世界を揺さぶり、国際情勢が暮らしへどう影響するかも、明らかになりました。

たとえば「空襲」という言葉は、前号のときよりも、ずっとリアリティを持って響くのではないのでしょうか。体験者の言葉へ真摯に耳を傾ける、取材者たちの受けとめ方のなかに、過去を現在や未来へつなげる何かを感じてもらうことが大切ではないかと考えます。

#### ◎調べて見つけるおもしろさ

オンラインでいろいろな事項を検索し、情報を調べたり見つけたりすることが、多くの人の日常になっています。

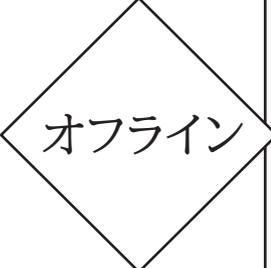
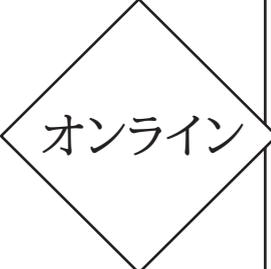
印刷されたアナログ媒体であっても、調べたり見つけたりしやすい手がかりがあれば、もっといろいろ知りたくなってくるものではないのでしょうか。他のメディアやコンテンツとも連携させながら、知的好奇心を刺激していくことが大切ではないかと考えます。

## 関連資料として展開するメディアとコンテンツ

「関連資料」という呼び方は、有形の何かを指すようにも感じられますが、本編となる冊子のコアコンテンツが＜戦争・戦災体験＞であるなら、そのような内容への人々の関心や興味を喚起して、実際に冊子を手にして開くところまで導いていく、有形・無形の促進活動全体を指すものと受けとめられるように、私たちは感じます。

また、冊子そのものは、オフラインのアナログメディアではあるものの、必ずしもそこが到達点ではなく、むしろそこを起点として、オフライン／オンラインを行き来しながら、平和への区民の意識の高まりをめざしていくプラットフォームのようなものが、将来は求められるのではないのでしょうか。

本案件においては、以下のようなオフライン／オンラインにおける展開を提案させていただきます。

 <p>オフライン</p>	<p><b>印刷メディア</b></p> <p><b>【本編冊子：インデックスの新設】</b> 本編へ新たに加えるインデックスは、第4集だけでなく既刊の3冊もカバーする、利便性や総合性を高めるためのツールとなります。</p> <p><b>【宣材リーフレットの作成】</b> 本編や下記の動画ディスクの内容を訴求する、配布用リーフレットのデータを作成・提供します。</p>
	<p><b>動画メディア</b></p> <p><b>【DVD の作成】</b> 体験者たちのインタビューや、取材のための学習や準備をする高校生や大学生たちの姿などを動画に撮影。それらを、一つのビデオ作品に編集してオーサリング。ディスクメディアのパッケージとして納品します。</p>
	<p><b>リアルな活動</b></p> <p><b>【区民団体との連携】</b> 区内の公共施設等で活動する、＜昔の港区＞について学び合う語り部サークルなどと連携し、子どもたちや若い世代との交流イベントなどで動画の上映をしてもらうことが可能ではないのでしょうか。また、実際に取材をした高校生や大学生たちにも、その活動へ参加してもらうことで、新たな広がりも期待できそうです。</p>
 <p>オンライン</p>	<p><b>ウェブメディア</b></p> <p><b>【ポータルサイトの作成】</b> 体験者たちが語る戦争・戦災の記憶や、取材する側の思いなどのインタビュー動画、冊子のPDF など、本編に関わるマルチメディアコンテンツを集約して掲載する一方、冊子本編を制作する過程や、関連する催しなども告知。連携する団体や関係する事項のリンク集なども掲載する、ポータルサイトを作成します。</p>
	<p><b>ソーシャルメディア</b></p> <p><b>【公式アカウントからの発信支援】</b> 高校生や大学生たちが、取材前に学んだり準備したり、実際に取材する様子などを、X (Twitter)・Facebook・Instagram等の港区公式アカウントから、随時発信していただけるよう、写真やテキストによる記事素材を提供させていただきます。</p>
	<p><b>動画シェアメディア</b></p> <p><b>【公式チャンネルからの配信支援】</b> 体験者へのインタビュー動画や、取材の雰囲気もわかる告知動画等を、YouTube の港区公式チャンネルから配信していただけるよう、最適な仕様に整えた動画素材を提供させていただきます。</p>

## ポータルサイトの具体的な展開

冊子の制作にもとづきながら、戦争・戦災体験にかかわる情報を整理して広く紹介することで、平和への意識を高めていくための、ポータルサイトの作成を提案いたします。それ自体に固有のコンテンツを持つのではなく、他サイトや SNS 等に掲載されたコンテンツや、関連する項目や団体の情報など、興味を持った内容へアプローチしやすくすることを、目的にできればと思います。



ポータルサイトのタイトル (仮)

タスク (動詞) 型分類によるメニュー

港区の平和教育教材の紹介

港区の平和への取り組み施策の紹介

体験者の個別インタビュー動画を掲載

完成版動画のプレイヤー画面

サイトは、制作の早い段階でプレリリースし、制作のプロセスを折々に告知。予告的な動画も掲載し、広報紙など他媒体との連携も図りながら、冊子への関心を高めてまいります。

発行後は、冊子の PDF やインタビュー動画などとともに、関連する団体の活動などの案内も、順次掲載しながら、次年度以降も継続的に更新運用していくことも可能となるよう構成していきます。

タスク型メニュー内のトピックス項目

トピックス項目は、随時更新することを想定していますが、SNS のタイムラインを埋め込むことで、サイト自体での更新は行わないやり方も可能です。

港区の平和宣言関連の項目へのリンク

都や他自治体の関連項目へのリンク

※実際のサイト作成にあたっては、サーバーやドメイン名、静的／動的など、技術面や運用面でのさまざまな擦り合わせが必要となりますので、関係する庁内の所管部署との仕様調整を行ったうえで、進めさせていただきます。

## 動画コンテンツの具体的な展開

お年寄りが語る戦争・戦災体験の、言葉としての意味を正確に理解するには、文字で読むのがいちばんです。けれど、どのような声や表情でその言葉を語ってくれているのかや、人柄や思いの深さといった微妙なニュアンスまでは、映像や音声で視たり聴いたりしなければ、感じる事が難しいはずですよ。

動画の強みは、そのような視覚や聴覚へじかに触れていく、エモーショナルな訴求力にあるのではないのでしょうか。そして、誰もが手軽に動画を撮って編集したり投稿したりするような、動画が日常化した時代だからこそ、プロが作成する動画のクオリティは、とくにネット視聴において明確な違いとなってくるように思われます。

DVD へは、しっかりと構成したパッケージ動画を高精細画質で収録。YouTube 等の動画シェアサイトでは、制作過程での告知動画や、個別のインタビュー動画なども掲載するなど、それぞれのメディアの特性を活かした動画の展開を図ってまいります。

### 基本的な演出コンセプト

- ① その人ならではの語り口を活かす  
→体験者の声やしぐさなど、個性を活かした証言
- ② 高校生や大学生の成長を捉える  
→学びや取材のなかでの、揺らぎや変化に着目
- ③ 対話の臨場感を活かす  
→異世代による対話のぎこちなさや恥じらいも収録

### 撮影・編集コンセプト

- ① 内容に即した撮影場所  
→街角や公園など、内容にふさわしい場所の選択
- ② 思い出の品や写真などを活かす  
→持参してもらったアイテムを積極的に活用
- ③ 穏やかで抑制した動画編集  
→無理に盛り上げず、重い内容も端正に編集

#### ▶ 告知動画

学習や準備をする学生たちの声や、インタビューが始まった制作過程の様子などを収録し、早いテンポのティザー動画として予告編的に編集。

YouTube の公式チャンネルへアップして、ポータルサイトに掲載するとともに、港区の公式サイトへの掲載や、各種の SNS による拡散も図ることで、ネットユーザーの関心や興味の喚起を図ります。



#### ▶ インタビュー動画

何組かの体験者取材で収録した動画を、それぞれの体験者ごとのロングインタビュー動画として編集。作品として整理編集された完成動画にはない、素材感のある動画は、体験者一人ひとりの個性がよく表れる、魅力あるコンテンツとなるはずですよ。

対話する学生たちの表情や、その後の感想なども合わせて編集すれば、取材現場の雰囲気がさらに伝わってくるはずですよ。



#### ▶ オーサリング動画

オープニングからエンディングまで、本誌制作の流れを追いながら、綿密な構成で編集された完成版のビデオ作品。チャプターを設けて DVD へ収録します。



真剣に学ぶ学生たちや、どう話そうかと考えるお年寄りたち。実際のインタビューが始まれば、お年寄りたちが語る体験を聴きながら、だんだん表情が変わっていく学生たち。そして、取材を終えてからの、振り返りの座談会。

そんな具合に、取材の進行に即しながら編集していくことで、視聴者が動画を通して追体験ができるよう、工夫してまいります。

